九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アガサ・クリスティの推理短編小説における過去の表現 ： フランス語とスペイン語の対照の観点から

山村, ひろみ
九州大学比較社会文化研究院

https://doi.org/10.15017/8676

出版情報：比較社会文化. 12, pp.39-56, 2006-03-20. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第12巻（2006）39～56頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.12（2006）, pp.39～56

アガサ・クリスティの推理短編小説における過去の表現
― フランス語とスペイン語の対照の観点から ―

Las expresiones del pasado en las obras cortas de Agatha Christie
― desde el punto de vista contrastivo del francés y el español ―

山　村　ひろみ
Hiromi Yamamura

Este ensayo tiene como objetivo hacer un estudio contrastivo de los comportamientos de las formas verbales del pasado en francés y en español, basándose en los datos hallados en tres obras cortas de Agatha Christie. Como resultado se destacan los siguientes puntos: ① la función del "pasado del pasado" asignada al pqp. en francés no está sólo en señalar la anterioridad de una situación a alguna otra situación pasada sino también en denotar una situación que tuvo lugar en el mundo NO-comentado. Es decir, el pqp. siempre tiene alguna relación, aunque negativamente, con el "mundo comentado" basado fundamentalmente en el momento del habla. Esto se comprueba en el hecho de que el pqp. en fancés aparezca con frecuecia en la transción del "mundo narrado" al "mundo comentado" o del "mundo comentado" al "mundo narrado", ② En cambio, el pqp. en español que aparece sólo esporádicamente se refiere sólo a una situación que denota la anterioridad a alguna otra situación concreta que, a su vez, es anterior al momento del habla, ③ la anterioridad que denota el ps. en español a otra situación pasada está basada en una relación lógica, o de causa－efecto que se encuentra entre las situaciones(o proposiciones) en cuestión.

1．はじめに

フランス語とスペイン語はともに俗ラテン語をその母体とし発展してきた系統を同じくする言語である．また，両者は一般的に，類型的にも同一グループに属す言語と見なされてきた．このように，従来，フランス語とスペイン語は系統的にも類型的にも同一の枠組みに分類されてきたことから，これら二言語の間に存在する類似点は指摘されることはあっても，その相違点について詳しい考察が行なわれることは少なかった．しかしながら，フランス語とスペイン語の実態を観察すると，両者の間には系統や類型を異にする言語との間に想定される以上の相違が確認されることがある．本稿は，そのようなフランス語とスペイン語との相違点のひとつとして，両言語における過去表現，すなわち，過去の事態に言及する時制形式の振る舞いを取り上げ，その具体的な記述および分析を行なうものである．

フランス語とスペイン語の過去の表現を比較対照するにあたり，本稿は，英語をオリジナルとするアガサ・クリスティの推理短編小説3作品のフランス語版とスペイン語版を取り上げ，その中に出現する様々な過去表現の振る舞いの観察および分析を試みた．資料体として当該推理小説を取り上げたのは，それが後に述べるいわゆる「額縁」構造を取ったもので，フランス語とスペイン語の過去表現の類似点と相違点を明示するのに役立つのではないかと予想したからであるが，結果的に，この選択は間違っていなかったと思われる．本稿で指摘されるフランス語とスペイン語の過去表現の諸特徴は，「額縁」構造という特殊な語りの表現を取る小説においてこそその効果を十分に発揮するものだったからである．しかし，このことは本稿で明らかになった過去表現におけるフランス語とスペイン語の類似と相違が，小説という限られた文体の言語においてのみ有効であることを示すものではない．後述するように，ここで確認された過去表現における両言語の相違，とりわけ，フランス語の大過去形とスペイン語の点過去形の関係は，小説以外の文体，口語においても確認されるものだからである．すなわち，本稿で指摘される過去表現をめぐるフランス語とスペイン語の類似と相違は各言語の時制体系の特徴に基づくものと考えられるのである．

2．Benveniste の時制論と Weinrich の時制論

本節では，本稿が対象とするフランス語とスペイン語の

時制形式，とりわけ，小説に出現する時制形式に言及した先行研究として，Benveniste(1966)とWeinrich(1976)を取り上げる[1]．

Benveniste(1966)はフランス語の時制形式について述べたものだが，それは以下のように2つの異なる体系に区別されると主張している．

> "Les temps d'un verbe français ne s'emploient pas comme les membres d'un système unique, ils se distribuent en deux systèmes distincts et complémentaires. Chacun d'eux ne comprend qu'une partie des temps du verbe ; tous les deux sont en usage concurrent et demeurent disponibles pour chaque locuterur. Ces deux systèmes manifestent deux plans d'énunciaton différents, que nous distingurons comme celui de l'*histoire* et celui du *discours*." (Benveniste 1966 : 238，下線は引用者)

Benvenisteの主張する2つの体系はそれぞれhistoire, discoursと呼ばれるが，このうちhistoireは次のように説明されている．

> "L'énonciation *historique*, aujourd'hui réservée à la langue écrite, caractérise le récit des événements passés. Ces trois termes,《récit》,《événement》,《passé》, sont également à souligner. Il s'agit de la présentation des faits survenus à un certain moment du temps, sans aucune intervention du locuteur dans le récit. Pour qu'ils puissent être enregistrés comme s'étant produits, ces faits doivent appartenir au passé. (Benveniste 1966 : 238-239)

上記によれば，histoire, énonciation historiqueとは「過去(passé)」の「出来事(événement)」の「語り(récit)」である．その典型的なものとして，本稿が後に扱う小説といった文学作品が考えられるが，Benvenisteによれば，histoireは必ずしもそのようなジャンルに限定されない．重要なのは，énonciation historiqueには「話し手(locuteur)」が何ら介入しないということであり，この条件を満たすものは等しくhistoireと見なされるからである．この「語り」に対する話し手の非関与性について，Benvenisteは以下のように述べている．

> "Nous définirons le récit historique comme le mode d'énonciation qui exclut toute forme linguistique《autobiografique》. L'historien ne dira jamais *je* ni *tu*, ni *ici*, ni *maintenant*, parce qu'il n'empruntera jamais l'appareil formel du discours, qui consiste d'abord dans la relation de personne *je:tu*." (Benveniste 1966 : 239)

つまり，Benvenisteの言うhistoireとは自伝的言語形式を一切排除する言表で，「私(je)」「君(tu)」「ここ(ici)」「今(maintenant)」といった語が依拠する言語発話の場とは全く無関係のものなのである．このhistoireの特徴はそこに用いられる時制形式にも及ぶ．その結果，Benvenisteはhistoireに使用される時制形式にも次のような制限を設けることになった．

> "Sera pareillement défini le champ de l'expression temporelle. L'énonciation historique comporte trois temps: l'aoriste(＝passé simple ou passé defini), l'imparfait(y compris la forme en *-rait* dite conditionnel), le plus-que-parfait. (Ibid.)

上記に従えば，Benvenisteがhistoireの時制と認めるのは基本的にはpassé simple「単純過去」(以下，ps.と略記)[2]，imparfait「半過去」(以下，imp.と略記)，plus-que-parfait「大過去」の3つということになる[3]．一方，histoireに対するdiscoursとはどういうものなのか．それに対するBenvenisteの説明は以下のとおりである．

> "Il faut entendre *discours* dans sa plus large extension : toute énonciation supposant un locuteur et un auditeur, et chez le premier l'intention d'influencer l'autre en quelque manière." (Benveniste 1966 : 241-242)

この引用文によれば，discoursはhistoireとは逆に，まず，話し手(locuteur)と聞き手(auditeur)を想定し，話し手が聞き手に対して何らかの形で影響を及ぼそうとする言表(énonciation)ということになるが，その典型は通常の会話，口語ということになろう．このことはdiscoursが言語発話の場に直接関係づけられたものであることを示すものだが，実際，discoursにはhistoireに見られたような人称や直示的表現の制約は見当たらない．discoursのこのような特徴は当然その時制形式にも及ぶ．以下のBenveniste

1 Weinrich(1976)はドイツ語によるオリジナル版Weinrich(1964)のスペイン語訳版である．
2 Benvenisteはaoristeという用語を用いているが，本稿ではpassé simpleを用いる．
3 Benvenisteの引用文にはこの他に－*rait*を含む条件法現在形もあげられているが，本稿では扱わない．

の指摘を参照されたい．

> "Il faut surtout souligner les trois temps fondamentaux du discours : présent, futur, et parfait, tous les trois exclus du récit historique (sauf le plus-que-parfait). Commun aux deux plans est l'imparfait." (Benveniste 1966 : 243)

これに従えば，discours の基本的時制は présent「現在」，futur「未来」，parfait「複合過去」（以下，pc.と略記）の3つであるが，これらはすべて前述の histoire から排除されていたものである．とはいえ，ここで Benveniste が，先に histoire の時制として分類した imp.と大過去の2つの時制を discours の時制としても扱っている点は注目すべきである．つまり，Benveniste は，imp.と大過去は histoire と discours の両体系に関係する時制形式と解釈しているのであるが，これは次に見る Weinrich(1974)の解釈と大きく違う点だからである．

Weinrich(1974)は，いわゆる動詞の時制を物理的「時間」から切り離し，上で見た Benveniste と同じく発話機能の違いという観点から見直そうとしたものである．その対象となる言語はドイツ語，英語，フランス語，スペイン語，イタリア語と幅広いが，どの言語についても同じ原則，すなわち，言語には「物語世界(mundo narrado)」の時制体系と「コメント世界(mundo comentado)」の時制体系が存在し，当該言語の時制形式はすべてこれら2つの体系のどちらか一方に属す，という原則に従うとしている．以下では，まず，Weinrich 理論の要になる「物語世界」と「コメント世界」の意味するところから見ていこう．Weinrich の言う「物語世界」とは，次のようなものである．

> "El mundo narrado es indiferente a nuestro Tiempo. Puede quedar fijado en el pasado por una fecha, o en el presente o el futuro por cualquiere otro dato. Esto no cambia para nada ni el estilo del relato ni la situación hablada que le es propia, lo cual explica el que muchos narradores puedan hacer alarde de una indiferencia verdaderamente provocadora respecto del Tiempo." (Weinrich 1974 : p. 76，下線は引用者)

上記によれば，Weinrich の「物語世界」とは我々を取り巻く現実の時間(Tiempo)に対して無関心(indiferente)な世界ということになる．これは先に見た Benveniste の histoire が話し手・聞き手の存在する言語発話の場と無関係だったのと共通するものと言ってよかろう．一方，「物語世界」に対する「コメント世界」については，次のように述べられている．

> "En ella(＝la situación comunicativa no narrativa，引用者注) el hablante está en tensión y su discurso es dramático porque se trata de cosas que le afectan directamente. Aquí el mundo no es narrado, sino comentado, tratado. El hablante está comprometido." (Weinrich 1974 : p. 69　下線は引用者.)

Weinrich の言う「コメント世界」とは Benveniste の discours のように，まず，話し手が存在し，その話し手が常に緊張を強いられる世界である．そこでは話し手に直接影響を与える様々な事が問題になっているからである．この Weinrich の「コメント世界」は，発話に参加する者への影響を問題にするという点で Benveniste の discours と極めて近いものだと思われる．このように見てくると，Weinrich の「物語世界」は Benveniste の histoire に，また，その「コメント世界」は Benveniste の discours に対応するように見えるが，Weinrich の説と Benveniste の説は具体的な時制形式の解釈にあたり決定的な違いを見せる．

Weinrich は「物語世界」と「コメント世界」を峻別した後，各言語の時制がこれら2つのどちらに属すかを明示した．それに従えば，例えばフランス語の時制は次のように分類されることになる[4]．

mundo narrado「物語世界」:ps., imp., 大過去
mundo comentado「コメント世界」:現在，未来，pc.

上記の Weinrich のフランス語時制の分類の特徴は，Benveniste とは異なり，ひとつの時制は必ず「物語世界」か「コメント世界」のどちらか一方にしか属さない，という点にある．それは，具体的には，Benveniste が histoire と discours の両方に分類した imp.と大過去が，Weinrich ではただ「物語世界」のみに属すものと解釈されていることによって示される．

以上，本節では後に行う観察の参考とするために，小説という環境に出現する過去表現がこれまでどのように理解されてきたかを Benveniste(1966)と Weinrich(1974)を基に概観した．その結果，Benveniste，Weinrich のどちらとも，時制形式には過去の出来事の語りに用いられものと，話し手と聞き手の存在を前提とし発話の場に依拠しながら用いられるものの2種類がある，とする点においては意見

4　ここでは Benveniste との比較において関与的な時制形式だけを取り上げた．Weinrich の実際の分類では，ここにあげた以外の時制形式も取り上げられている．

の一致を見せるが，その2種類にどのような時制形式を割り振るか，特に，後の観察の節で詳細に見ることになる過去の時制形式をどのように分類するかにおいてはそれぞれ見解を異にすることが確認された．

3．資料体について

さて，フランス語とスペイン語の過去の時制形式の振る舞いを観察する前に，その観察の基となった資料体について説明しておきたい．

今回本稿が用いた資料体は，Agatha Christie の Miss Marple シリーズの第一作目 *The Thirteen Problems* の中の3作品，*The Tuesday Night Club*，*The Idol House of Astarte*，*Ingots of Gold* のフランス語版，*Le club du mardi*，*La sanctuaire d'Astarte*，*Les lingots d'or* とスペイン語版，*El club de los martes*，*La casa del Ídolo de Astarté*，*Lingotes de oro* である[5]．

フランス語とスペイン語の過去表現を比較対照するにあたりこのような資料体を選択したのは，前節で見たように，ある言語の時制形式を考察する際には，その形式が出現する環境，すなわち「語り」という環境に出現しているのか，それとも発話時を基盤とする「非語り＝コメント」という環境に出現しているのかが問題になってくるからである．言い換えるならば，時制形式の振る舞いを観察する際には，この2つの異なる出現環境に常に注意を払わなければならないのである．そういう意味において，先にあげた3作品は理想的なものと言える．なぜなら，それらはいわゆる「額縁」構造の小説だからである．ここで言う小説の「額縁」構造とは，ひとつの「語り」（これを「語り1」とする）の中にまた別の「語り」（これを「語り2」とする）が組み込まれている構造のことで，次のように図示できるものである．

［語りⅠ開始（語りⅡ開始，語りⅡ終了）語りⅠ終了］

図1　「額縁」構造

本稿が用いた資料体で言うならば，「語り1」は火曜クラブという会に集うメンバーたちについての話で，そこでは各メンバーの他愛もないお喋りが展開される．従って，この「語り1」は小説というよりはその登場人物の会話から構成されたもので Benveniste の discours，Weinrich の「コメント世界」に対応していると言ってよい．他方，「語り2」に相当するのは「語り1」に登場したメンバーが語るミステリー話で，Benveniste の histoire，Weinrich の「物語世界」に対応したものである．つまり，「額縁」構造を取る小説を資料体とするならば，同じ一つの作品の中で discours/「コメント世界」と histoire/「物語世界」における時制形式の実態を見ることができるのみならず，discours/「コメント世界」あるいは histoire/「物語世界」だけの資料では知ることのできない discours/「コメント世界」から histoire/「物語世界」，また，その逆の histoire/「語りの世界」から discours/「コメント世界」への移行における時制形式の振る舞いを観察することができるのである．

4．観察

4．1．対象とする過去の時制形式と出現環境

本節では，先に紹介した3つの資料体に出現するフランス語とスペイン語の過去に言及する時制形式の実態を観察する．そのためには，まず，本稿が対象とするフランス語とスペイン語の過去表現を明らかにしておかねばならない．それは以下のとおりである．

フランス語

複合過去（passé composé, pc.）　例　j'ai parlé
　　je sui alleé(e)
単純過去（passe simple, ps.）　例　je parlai
半過去（imparfait, imp.）　例　je parlais
大過去（plus-que-parfait）　例　j'avais parlé
　　j'etais allé(e)

スペイン語

現在完了（pretérito perfecto compuesto, pc.）
　例　he hablado
　　he ido
点過去（pretérito perfecto simple, ps.）　例 hablé
線過去（pretérito imperfecto, imp.）　例　hablaba
過去完了（pluscuamperfecto）　例　había hablado
　　había ido

フランス語の複合過去(pc.)，スペイン語の現在完了（以下，pc.）は，名称は異なるがどちらも俗ラテン語の habeo＋過去分詞から派生した時制形式である．フランス語の pc. では過去分詞に置かれる動詞の種類によって avoir あるいは être の助動詞の選択が起こり，être の場合には主語の性数に過去分詞が一致することになるが，スペイン語の pc. では助動詞は常に haber で過去分詞も無変化である．なお，スペイン語の pc.を過去の時制形式と見なすか否かについては意見の分かれるところであるが，本稿はフランス

5　以下では，*Tuesday Night Club*，*The Idol House of Astarte*，*Ingots of Gold* をそれぞれ作品1，作品2，作品3と呼ぶ．

語との比較対照という観点から，取り合えず，過去の事態に言及することのできる形式として扱うことにした[6]．フランス語の単純過去(ps.)，スペイン語の点過去（以下，ps.)，フランス語の半過去(imp.)，スペイン語の線過去(以下，imp.)も名称は異なるが，元はそれぞれラテン語の完了形
と未完了形いうことで共通する．また，フランス語の大過去，スペイン語の過去完了（以下，大過去）は，先に見たフランス語のpc.とスペイン語のpc.の助動詞部分が現在形からimp.に転換したものである．以下では，ここにあげたフランス語とスペイン語の時制形式が，次に説明する様々な環境のどの環境に出現するかを観察することになる．

フランス語とスペイン語の過去に言及する時制形式の振る舞いを調べるにあたり，本稿は，特に，それらが出現する環境に注目した．すなわち，　Benvenisteのhistoire / discours, Weinrichの「物語世界」／「コメント世界」の区別に注目し，先に見た「額縁」構造の「語り１」「語り２」のどちらにどの形式がより多く出現するのか，また，小説中の地の文に出現するのか，あるいは，小説中の会話文に出現するのかを問題としたのである．このような諸環境のそれぞれに，先にあげたフランス語とスペイン語の過去の時制形式がどのような頻度で出現したかをまとめたのが，次の観察結果である．

４．２．各作品中の過去の時制形式の出現頻度

４．１．で見た過去の時制形式の出現頻度を「語り１」「語り２」および小説の「地の文」「会話文」という出現環境別にまとめると表１になる[7]．各出現数は当該形式の延べ数である．また，括弧内のパーセンテージは，過去形出現総数に対する当該形式の割合を示す．

表1：各作品中の過去形の出現頻度

作品１．El club de los martes

スペイン語(過去形出現総数：322)

	語りⅠ		語りⅡ	
	地の文	会話文	地の文	会話文
ps.	82(25.5%)	62(19.3%)	57(17.7%)	1
imp.	20(6.2%)	24(7.5%)	28(8.7%)	1
大過去	2	9(2.8%)	16(5.0%)	0
pc.	0	18(5.6%)	0	2

フランス語(過去形出現総数：289)

	語りⅠ		語りⅡ	
	地の文	会話文	地の文	会話文
ps.	82(28.4%)	7(混在)2.4%	27(9.3%)	0
imp.	16(5.5%)	33(11.4%)	28(9.7%)	0
大過去	2	24(8.3%)	25(8.7%)	0
pc.	0	41(14.2%)	0	4

作品２．La casa del ídolo de Astarté

スペイン語(過去形出現総数：423)

	語りⅠ		語りⅡ	
	地の文	会話文	地の文	会話文
ps.	32(7.6%)	60(14.2%)	167(39.5%)	9(2.1%)
imp.	0	24(5.7%)	79(18.7%)	7(1.7%)
大過去	0	2(0.5%)	16(3.8%)	0
pc.	0	14(3.3%)	0	13(3.1%)

フランス語(過去形出現総数：420)

	語りⅠ		語りⅡ	
	地の文	会話文	地の文	会話文
ps.	37(8.8%)	4(1.0%)	140(33.3%)	0
imp.	0	24(5.7%)	101(24.0%)	9 (2.1%)
大過去	0	15(3.6%)	29(7.1%)	0
pc.	0	39(9.3%)	0	22(5.2%)

作品３．Lingotes de oro

スペイン語(過去形出現総数：357)

	語りⅠ		語りⅡ	
	地の文	会話文	地の文	会話文
ps.	24(6.7%)	43(12.0%)	120(33.6%)	24(6.7%)
imp.	1	26(7.3%)	71(19.9%)	4(1.1%)
大過去	0	8(2.2%)	16(4.5%)	1
pc.	0	6(1.7%)	0	13(3.6%)

フランス語(過去形出現総数：360)

	語りⅠ		語りⅡ	
	地の文	会話文	地の文	会話文
ps.	24(6.7%)	8(2.2%)	111(30.9%)	0
imp.	0	25(7.0%)	85(23.7%)	6(1.7%)
大過去	0	16(4%)	25(6.9%)	4(1.1%)
pc.	0	25(7.0%)	2[特殊]	29(8.1%)

6　スペイン語のpc.を非過去系列の時制形式と見なすものとしては寺崎(1998)が，また同形式を過去系列の時制形式と見なすものとしてはCarrasco Gutiérrez(1999)がある．

7　出現環境の判断については，「語り１」の「地の文」「会話文」の区別は比較的容易であったが，「語り２」の「地の文」「会話文」の区別は困難であった．取り合えず以下では，「語り２」の「地の文」は「語り１」の登場人物が「語った」内容とし，「語り２」の「会話文」とはその「語られた」内容の登場人物が実際に発話し，そのようなものとしてハイフン等，直接引用の記号で表示された部分とした．

5．考察

本節では4．2．の観察結果から，過去に言及する時制形式をめぐるフランス語とスペイン語の類似点と相違点をそれぞれ指摘し，考察を加えていく．

5．1．フランス語とスペイン語の類似点

まず，フランス語とスペイン語の類似点から見ていこう．表1を見ると，3作品すべてに確認されることとして，「地の文」では「語り1」「語り2」に拘らず，pc.が出現しないことがあげられる．これは2．で見たBenvenisteおよびWeinrichの説とうまく合致する点である．Benvenisteはpc.を発話の場に依拠するdiscoursの代表的な時制形式と見なし，Weinrichも同様にpc.を「コメント世界」に典型的な時制形式としていたからである[8]．

次に指摘すべきフランス語とスペイン語の類似点は，両者とも「語り1」の「地の文」ではps.の出現頻度が高くなっている，ということである．同環境ではimp.や大過去が出現することもないわけではないが，その頻度はps.のそれと比べると低い．「語り1」は小説の一部という意味では「物語世界」と言うことができるが，実際は「語り2」という本来の意味での「物語世界」を誘導する，多分に解説的な部分である．したがって，そこには「物語世界」に特有のimp.や大過去が出現することは少ないのだと思われる．

他方，「語り2」の「地の文」に注目してみると，ここでは作品によってps.の出現頻度に違いがあるのが分かる．作品2，作品3の「語り2」の「地の文」では，フランス語，スペイン語ともにps.の出現頻度が高いが，作品1の「語り2」の「地の文」では，フランス語とスペイン語の間でps.の出現頻度にズレがあり，前者のps.の出現頻度は後者のおよそ半分となっている．作品1に見られるこのps.の出現頻度の違いは，当該環境に出現したフランス語の大過去の振る舞いと密接な関係があると思われるが，この点については後述する．

5．2．フランス語とスペイン語の相違点

本項では，過去の時制形式をめぐるフランス語とスペイン語の相違点を見る．取り上げるのは，会話文中のフランス語のpc.とスペイン語のps.，および，フランス語の大過去とスペイン語のps.である．

5．2．1．会話文中におけるps.とpc.

4．2．の表1を見ると，全作品において，①フランス語の「会話文」においてはpc.の出現頻度が極めて高くps.の出現頻度が極めて低いこと，②スペイン語の「会話文」においてはps.の出現頻度が高くpc.の出現頻度が低いこと，が分かる．このうち①は，先に見たBenveniste, Weinrichの説に概ね適ったものと言える．「会話」が話し手と聞き手の存在を前提とするものである限り，そのような環境で出現するのはもっぱらpc.であり，Benvenisteのhistoireあるいは Weinrichの「物語世界」に属すps.ではない，と思われるからである．一方，②は，Benveniste, Weinrichの主張のどちらとも相容れないという点で看過できないものである．上で見たように，彼らの主張によれば，話し手と聞き手が想定される「会話」ではpc.が，また，話し手や聞き手が想定されない「語り」ではps.が用いられるということだったが，スペイン語のデータはその予想を見事に裏切るものとなっているからである．問題は，Benvenisteのdiscours, Weinrichの「コメント世界」に出現することのできるスペイン語のps.にある．このps.の振る舞いのために，スペイン語のpc.は，フランス語のpc.のように「会話」という環境で優先的に用いられる時制形式とは必ずしもなっていない．換言するならば，スペイン語のps.がhistoireとdiscours，「物語世界」と「コメント世界」の両方に出現することができるために，スペイン語のdiscours/「コメント世界」では，発話時以前に生起した事態に言及する形式としてps.とpc.の間で競合が起こるのである．

このスペイン語の「会話文」中に出現するps.は，とりわけ，Weinrichの時制論にとっては大きな問題になるものである．先に見たように，Weinrichはpc.が「コメント世界」，また，ps.が「物語世界」に言及するということを，これら二形式を有する諸言語すべてにあてはまる一般原則としていたからである．つまり，今回フランス語のpc.とスペイン語のps.が同じ「会話文」に対応する形で出現していたという事実は，同一の事態に関して，「コメント世界」の時制形式と「物語世界」の時制形式という相反する二つの時制形式が用いられていたということであり，Weinrichの唱える一般原則に対する強力な反例となっているのである．以上，表1の結果から，「会話文」におけるフランス語とスペイン語のpc.とps.の振る舞いの特徴を述べたが，以下ではその特徴の違いを具体例をあげながらより詳しく見ていく．まず，(1a)(1b)を参照されたい[9]．

(1)　(作品1)

a.

8　作品3のフランス語訳「語り2」の「地の文」にはpc.が2回出現しているが，これは次のような「地の文」に挿入された文中に出現したものであり，純粋の「地の文」に出現したものとは言えない．従って，今回では考慮の外とした．Puis le camion est repartit et sortit, pensait-il, par une autre porte, située cinq cents mètres plus près du village.

9　以下，(a)はフランス語版，(b)はスペイン語版を，波線部分は問題となっている時制形式を示す．また，丸括弧内の数字は互いに対応する時制形式を示す．最後のページ数は各資料体のページである．

– Par exemple, *hier matin*, il ① est arrivé quelque chose d'étrange à Mrs Carruthers. Elle avait acheté des calamars chez Elliot. Elle ② est entrée ensuite dans deux autres boutiques, et quand elle ③ s'est retournée chez elle, elle ④ s'est aperçue qu'elle n'avait plus ses calamars. Elle ⑤ est retournée dans deux des boutiques où elle était allée, mais ses calamars avaient complètement disparu. Cela me paraît très curieux. (p. 7)

b.

– Por ejemplo, la señorita Carruthers ① tuvo una experiencia muy extraña *ayer por la mañana*. Compró medio kilo de camarones en la tienda de Elliot. Luego ② fue a un par de tiendas más y, cuando ③ llegó a su casa, ④ descubrió que no tenía los camarones. ⑤ Volvió a los dos establecimientos que había visitado antes, pero los camarones habían desaparecido. A mí me parece muy curioso. (p. 262)

(1a)は「会話文」に出現したフランス語のpc.の例であり，(1b)は同じ環境に出現したスペイン語のps.の例である．ここで注目すべきは，フランス語とスペイン語のpc.とps.のうち，「昨日の朝」(フランス語でhier matin，スペイン語でayer por la mañana）のように直示的な過去の時の副詞句と共起することのできる形式は，フランス語ではpcであり，スペイン語ではps.だということで，これは両言語の過去表現のあり方を考える上で非常に重要な点と思われる．一方，上記の例文に出現していないフランス語のps.，スペイン語のpc.が共起することのできる時の副詞について言うと，前者は発話時を基準としない非直示的な副詞であり，後者はhoy「今日」，esta tarde「今日の午後」，esta semana「今週」，este año「今年」といった発話時をその範囲内に含む副詞となる[10]．これらのことから，フランス語とスペイン語のps.またpc.は，それぞれラテン語の完了形，俗ラテン語のhabeo＋過去分詞という共通する形式から発展してできた形式にも拘らず，今日のそれらの機能は互いにかなり異なったものになっていると考えられる．また，先にも述べたとおり，(1a)のフランス語のpc.が(1b)のスペイン語のps.の対応するという事実は，Weinrichの時制論にとっては問題となるところである．

次に，フランス語の「会話文」に出現したps.について述べる．先に述べたように，今回のフランス語資料体の「会話文」ではBenveniste, Weinrichの主張どおりpc.が頻繁に出現していたが，だからと言って，ps.がまったく出現しなかったわけではない．表1によれば，数は極めて少ないものの，「会話文」に出現したps.は確かに存在する．以下では，このフランス語では例外とも言える「会話文」に出現したps.の特徴を見てみる．

フランス語の「会話文」のps.はスペイン語の「会話文」に出現するps.とは違い，その出現環境にかなり強い制約がある．まず，当該のps.は「会話文」の冒頭にいきなり出現することは難しい．以下の例を参照されたい．

(2)　(作品1)

a.

– *En conséquence de quoi*, l'accusation ① s'écroula ? suggéra le révérend Pender.

– *En conséquence de quoi*, l'accusation ② s'écroula, répéta gravement sir Henry. On ne pouvait pas arrêter Jones sans rien pour l'étayer. (p. 16)

b.

– ¿ Y el caso ① se vino abajo ? - preguntó Pender.

– Y el caso ② se vino abajo – repitió sir Henry en tono grave–. No podíamos correr el riesgo de detener a Jones sin tener algo en que apoyarnos. (p. 269)

(3)　(作品2)

a.

– Nous n'aurions pas fait ça aujourd'hui, dit-il. Etant donné l'essor qu'a pris le roman policier, n'importe quel gamin sait qu'on doit laisser le corps là où on l'a trouvé. Mais en ce temps-là, nous l'ignorions et, *en conséquence*, nous ① ramenâmes le corps de Richard Haydon dans sa chambre, dans la maison de granit, et nous ② envoyâmes le majordome chercher la police à bicyclette. Une balade de quelque 18km. (p. 32)

b.

– Ahora sabemos más cosas – comentó – gracias a la afición por las novelas policíacas. Hasta un chiquillo de la calle sabe que un cadáver debe dejarse donde se encuentra. Pero entonces no teníamos estos conocimientos y por tanto ① llevamos el cuerpo a su dormitorio y ② enviamos al mayordomo para que fuese a buscar a la policía en su bicicleta: un paseo de unas doce millas. (pp. 282-283)

(2a)のフランス語のps.は一見「会話文」の冒頭に出現したもののように思われるが，実はそうではない．というのも，(2a)は，「語り2」のミステリーは開陳されたものの，

10　しかし，スペイン語については注意が必要である．本文であげられた発話時を含む副詞はpc.だけではなく，出現環境によってはps.と共起することも可能だからである．この点については山村(2004)を参照されたい．

その真相がどうなったかは結局分からずじまいになったということが語られた後，「語り１」に場面が転換した際の最初の発言だからである．つまり，この ps.は，「語り２」の真相が分からずじまいであったために「語り２」の結論部分をそのまま「語り１」の登場人物が引き継ぐことになり，あたかもその人物が「語り２」を語った当人のような形で発話されたものなのである．その証拠に当該 ps.の直前には「語り２」から「語り１」への移行を言語化した en conséquence de quoi という副詞句が置かれている．このような環境に出現した「会話文」中の ps.は，話し手あるいは聞き手に直接影響を与える discours/「コメント世界」に属すものと言うよりは，histoire/「物語世界」に属すものと言えるであろう．その意味において，(2a)は「会話文」の冒頭に出現した ps.ではあるが，Benveniste，Weinrich の説に反するものではないと考える．なお，このフランス語の ps.に対応するスペイン語文(2b)を見ると，フランス語の ps.の出現に重要な役目を果たす副詞句 en conséquence de quoi が欠けているのが分かる[11]．これは，スペイン語の ps.はその出現のためにフランス語のように histoire/「物語世界」を保証するものを必要としない，ということを明示したものであるが，このことは先に見たスペイン語の ps.の特徴，すなわち，同形式が histoire/discours,「物語世界」/「コメント世界」の両方に自由に出現することができるという事実ともうまく合致するものである．

(2a)と同様のことは，(3a)のフランス語の ps.についても言える．この例文の ps.は(2a)とは異なり，「会話文」の冒頭に出現したものではないが，pc.や現在形[12]と共起しているという点で(2a)と同じく特異なものと思われる．しかしながら，その特異さも ps.によって表出された事態の意味，また，その直前に置かれた en conséquence の意味を吟味すれば，見かけだけのものであることが了解される．すなわち，当該 ps.は「語り２」の内容を表出したものであり，その意味において，Benveniste の histoire, Weinrich の「物語世界」から何ら逸脱したものではないのである．

このように考えてくると，(3a)の特異性は当該 ps.にあるのではなく，むしろ，「語り２」の中に現在形や pc.で「語り１」の登場人物の意見が直接挿入された点にある，と言うことができる[13]．以上のように現在形や pc.と共起したフランス語の ps.の例は少なくない．以下の(4a)もそのひとつである．

(4)　(作品３)

a.

C'est *à compter de ce jour* que je me suis senti inquiet. J'avais bien dormi la première nuit, mais la nuit suivante mon sommeil ① fut très agité. Le dimanche matin ② se leva sur un ciel sombre et couvert, un orage menaçait. Je n'ai jamais su dissimuler mes états d'âmes *et* Newman ③ remarqua le changement qui s'était produit en moi. (p. 46)

b.

Creo que mi inquietud comenzó *a partir de aquel momento*. La primera noche había dormido bastante bien, pero la siguiente mi suenõ ① fue intranquilo y entrecortado. El domingo ② amaneció gris y triste, con el cielo encapotado y la amenaza de los truenos estremeciendo el aire. Me fue difícil disimular mi estado de ánimo y Newman ③ observó el cambio operado en mí. (pp. 293-294)

この例も(3a)の ps.と同様に，その文脈から，histoire/「物語世界」である「語り２」の中に「語り１」に属す話し手の感想が特別に挿入されたものであることが分かる[14]．したがって，ここでも特異なのは挿入された現在形や pc.の方であり，問題の ps.自体は本来的な histoire／「物語世界」の時制として機能していると言うことができる．ただ，(4a)には(2a)や(3a)とは異なり，en conséquence のように「語り１」から「語り２」への移行を明示する語句はなく，

11　オリジナルの英語版にもスペイン語版と同様に en conséquence de quoi に相当する表現はない．このことからも，フランス語の ps.が出現する際の特殊性が分かる．

12　以下，該当する時制形式は破線で示す．

13　Molendijk(2002:94)は "En 1865, Liszt visita l'Italie. Ses récitals eurent un succès énorme. Signalons au passage que Liszt fut aussi un grand compositeur de musique orchestrale."という文中で「発話時」基準の命令形と共起した ps.について，"Mais le PS peut aussi s'utiliser pour présenter un fait comme 〈isolé de son environnement textuel〉, auquel cas la phrase exprime l'antériorité pure et simple par rapport au moment de la parole."と述べている．しかし，本稿の観点からすると，当該 ps.は histoire/「物語世界」に挿入された発話者の発言中に出現したものに過ぎない．従って，当該 ps.も他の ps.と同様に histoire/「物語世界」に属すものであり，特別な解釈をする必要はないと考える．

14　(4a)については注意すべき点がある．それは第１行目の je me suis senti inquiet と第５行目の Je n'ai jamais su dissimuler ...の部分である．どちらもその内容から「語り１」よりはむしろ「語り２」に属しているように見えるからである．それにも拘らず，この二箇所で ps.ではなく pc.が出現している理由は次のように考えられる．つまり，前者については，その主文が現在形で表出されていることからも分かるように，当該文が出現している文全体としては「語り１」に属すものであること，さらに，対応するスペイン語文から分かるように，à compter de ce jour の存在が発話時との関係を強く示唆することから pc.が出現したと考えられ，後者については，対応する英語版 I am always a bad hand at hiding my feelings に対応するように，当該 pc.は ps.に相当するというものより主語の属性表現として出現した，と考えられるのである．

③の ps.は discours/「コメント世界」を象徴する pc.の直後に出現している．このことから，(4a)ではまさに出現する時制形式そのものが「言表世界」[15]，すなわち，histoire/「物語世界」か discours/「コメント世界」かを規定していると考えることができる．一方，(4a)の ps.に対応する(4b)のスペイン語の ps.にはそのような機能はない．先にも見たように，スペイン語の ps.は histoire/discours あるいは「物語世界」/「コメント世界」の両方に用いられるため，その出現自体が「言表世界」を決定することは難しいのである．とはいえ，スペイン語にもその出現が「言表世界」を指示するような時制形式がないわけではない．現在形や未来形，pc.などがそれである．なかでも，スペイン語の pc.はフランス語の pc.とは違い，発話時以前を示す直示的な時の副詞句と共起することはまれで，その主たる機能は，当該事態が生起した結果生じたと想定される状態が発話時に対して持つ関与性の表出にあるため，discours/「コメント世界」を示す典型的な時制形式と言える[16]．このようなスペイン語の pc.は，discours/「コメント世界」を示すという点ではフランス語の pc.と共通するが，ps.との関係という点からは異なっている．なぜなら，フランス語の pc.が histoire/「物語世界」を示す ps.の対立項として，discours/「コメント世界」を明示する時制形式なのに対し，スペイン語の pc.は，対立項であるべき ps.が histoire/「物語世界」のみならず discours/「コメント世界」にも言及するために，フランス語の pc.のように discours/「コメント世界」専用の時制形式とは見なされないからである．

さて，次に，何らかの形で「語られる」内容が予告された後に出現した「会話文」中のフランス語の ps.を見てみる．(5a)を見られたい．

(5)　(作品 1)

a.

－ Comme je vous le disais, les faits eux-mêmes sont très simples. Le décès ① fut attribué à un empoisonnement par la ptomaïne, le certificat ② fut établi en conséquence, et la victime ③ fut enterrée. Toutefois, les choses n'en ④ restèrent pas là. (p. 11)

b.

－ Como digo, los hechos fueron muy sencillos. Su muerte ① fue atribuida a envenenamiento por ingestión de alimentos en mal estado, se ② extendió el certificado correspondiente y la víctima ③ fue enterrada. Pero las cosas no ④ acabaron ahí. (p. 265)

(5a)の①から④のフランス語の ps.は「会話文」中に出現したものであるが，discours/「コメント世界」に言及するものではない．これらの ps.は，話し手がこれから「語る」ミステリー，すなわち，「語り 2」の要約であり，その意味において，histoire/「物語世界」に属すものだからである．(5a)の ps.が「語り 2」の要約であるのは，この会話の冒頭にある les faits eux-mêmes sont très simples.という文によって分かる．当該 ps.は，いわばこの文を具体的に解説したものなのである．興味深いのは，この冒頭の時制形式であろう．フランス語では sont という現在形なのに対し，スペイン語文では後に続く文と同じ ps.になっている．すでに見たように，スペイン語の ps.は，表出事態が発話時以前に生起したものである限り，histoir/「物語世界」，discours/「コメント世界」のどちらにも出現可能である．一方，フランス語の ps.はそれが表出することになる histoire/「物語世界」の予告なしに突然出現することは難しい．そのために，(5a)の最初の文だけは現在形で表出されることになったのだと考えられる．とはいえ，「語られる」ミステリーの予告があればいつでも ps.が出現するかと言えば，必ずしもそうではない．実際には，(6a)のように，「語られる」ミステリーの要約部分のみならず，その解説部分まですべて現在形で表出されることもある．

(6)　(作品 1)

a.

Les faits sont très simples. Trois personnes ① partagent un repas comprenant entre autres du homard en conserve. Dans le courant de la soirée, toutes les trois ② sont prises de malaises et ③ font venir un médecin à la hâte. Deux d'entre elles en ④ réchappent, et la troisième en ⑤ meurt. (p. 10)

b.

Los hechos son bien sencillos. Tres personas ① se reunieron para una cena en la que se sirvió, entre otras cosas, langosta enlatada. Más tarde, aquella misma noche, los tres ② se sintieron indispuestos y ③ se llamó apresuradamente a un médico. Dos de ellos ④ se restablecieron y el tercero ⑤ falleció. (p. 265)

(6a)は(5a)の数行前に出現したもので，同じく「語り 2」で展開されるミステリーの要約を示したものである．(6a)が(5a)と同じ内容を扱っているにも拘らず，その表出形式が異なっているのは，(6a)(5a)が発話された順序に関係するのではないかと思われる．(6a)は「語り 1」において初

15　本稿では，histoire と discours,「物語世界」と「コメント世界」のカバータームとして「言表世界」という用語を用いる．
16　山村（2004）参照のこと．

めて「語り２」のミステリーに言及したものである．したがって，この(6a)においてps.を用いると，特に，当該ミステリーの聞き手にとっては，まだその「語り」に対する準備ができていないという意味で唐突な印象を与えることになるのではあるまいか．それに対して，(5a)では，“comme je vous le disais, les faits eux-mêmes sont très simples.”という文が示すように，ミステリーの話し手と聞き手の間でこのすぐ後に当該のミステリーが開始されることになるについての了解がある．つまり，(5a)(6a)におけるps.と現在形の違いには，この「語り」が始まることについての了解の有無が大きく関係していると考えられるのである[17]．一方，(5a)(6a)に対応するスペイン語文を見ると，そこでは一貫してps.が出現している．これは，スペイン語では「言表世界」の如何に拘らず，当該事態が発話時以前に生起したものであればps.が使用されることを再度示したものである．

５．２．２．フランス語の大過去とそれに対応するスペイン語のps.

フランス語とスペイン語の相違点として，次に，フランス語の大過去とスペイン語のps.について見てみる．まず，上で見た表１のうち大過去の出現頻度を基にフランス語とスペイン語を比較してみると，表２のようになる．

表２：各作品中の大過去の出現頻度

		語り１		語り２	
		地の文	会話文	地の文	会話文
作品１	フランス語	2	19(6.6%)	30(10.4%)	0
	スペイン語	2	9(2.8%)	16(5.0%)	0
作品２	フランス語	0	15(3.6%)	30(7.1%)	0
	スペイン語	0	2(0.5%)	16(3.8%)	0
作品３	フランス語	0	11(3.1%)	29(8.1%)	4(1.1%)
	スペイン語	0	8(2.2%)	16(4.5%)	1

表２の数字は作品ごとの当該環境に出現した大過去の頻度数を示したものである．括弧内のパーセンテージは各作品に出現した過去形の総数に占める大過去の割合を示したものである．この表２からは，以下のことが分かる．

フランス語にしてもスペイン語にしても，「語り１」の「地の文」，また，「語り２」の「会話文」に大過去が出現することは稀である．一方，「語り１」の「会話文」，「語り２」の「地の文」では，他の過去形に比べるとその頻度は低いものの，フランス語，スペイン語双方において一定数の大過去が確認される．

表２において注目すべきは，「語り１」の「会話文」および「語り２」の「地の文」において観察される大過去の頻度数の違いである．「作品３」の「語り１」の「会話文」を除くと，どの作品でも当該環境における大過去の出現頻度はフランス語がスペイン語の1.5倍以上となっている．このように大過去の出現に関してフランス語とスペイン語の間に大きな違いがあるという事実は，これまで指摘されたことはなかったように思う．それは，フランス語，スペイン語どちらの言語においても，大過去は等しく「過去の過去」を示す形式と定義されており，あえてその「過去の過去」の実態にまで踏み込んだ考察を行う必要はないと思われてきたせいかもしれない．しかしながら，本稿の観察において，フランス語とスペイン語の大過去に上記のような違いがあることが確認されたからには，その実態を明らかにし，その相違についての適切な解釈が試みられるべきと考える．以下では，そのような観点から，フランス語の大過去とそれに対応するスペイン語の過去形，とりわけ，そのps.との対応関係について考察を加えていく．なお，以下では，これまでdiscours/「コメント世界」と記してきた言表世界は「発話世界」，histoire/「物語世界」と記してきた言表世界は「物語世界」と記述していく．

５．２．２．１．フランス語の大過去とそれに対応するスペイン語のps.：出現環境

前項で見たように，フランス語の大過去がスペイン語の大過去の二倍近くの頻度で出現するということは，フランス語の大過去がスペイン語の大過去以外の時制形式にも対応しているということでもある．このことから，それではフランス語の大過去はスペイン語のどのような時制形式と対応しているのか，という疑問が生じることになるが，本稿の資料体の観察結果による限り，それは，まず，スペイン語のps.ということになる．以下では，そのようなフランス語の大過去とスペイン語のps.を具体的に見ていく．

最初に取り上げるのは，過去の主文に従属した節に出現したフランス語の大過去とそれに対応したスペイン語のps.である．次の例を参照されたい[18]．

(7)　（作品３）

a.

－ Il y a aussi le témoignage de la femme peintre, dit

17　本稿が対象とした資料体は小説のため，「会話文」の中でもps.が出現しやすくなっている．しかし，実際のフランス語の話し言葉では，現在形とps.の選択は極めてまれであり，普通は現在形とpc.の選択となる．なお，フランス語の話し言葉における「語り」の時制形式，とりわけ，現在形とpc.の選択に関しては，塩田(2001)を参照されたい．

18　主文の動詞は下線で，また，当該時制形式は波線で示す．

Raymond West. Elle a déclaré qu'étant souffrante elle était restée éveillée presque toute la nuit, qu'elle aurait certainement entendu un camion, étant donné que ce n'était pas un bruit habituel et que la nuit avait été justement très calme après l'orage. (p. 53)

b.

— También tenemos la declaración de la artista — añadió Raymond —. Dijo que se encontraba muy mal y pasó despierta la mayor parte de la noche, de modo que hubiera oído sin duda alguna el camión, puesto que era un ruido inusitado y la noche había quedado muy apacible después de la tormenta. (p. 299)

(7a)(7b)は「語り2」が終了し「語り1」に戻った後の「会話文」中に出現したフランス語の大過去とスペイン語のps.である．フランス語の大過去はa déclaréというpc.で表出された主文の従属動詞として出現したものであり，当該事態が主文より前に起こったことを示している．対するスペイン語のps.も同様に，当該事態がdijoというps.で表された主文の事態より前に生起したことを表したものである．このような「過去の過去」に言及したスペイン語のps.は次のような形容詞節においても観察される．

(8)　(作品2)

a.

Il ne se releva pas et resta où il était tombé, face contre terre. (p. 30)

b.

No se levantó, sino que permaneció tendido en el lugar donde cayó. (p. 281)

さて，上記のフランス語の大過去とスペイン語のps.の対応関係から，スペイン語のps.には「過去の過去」を表出する機能が備わっていると速断すべきではない．当該環境に出現したスペイン語のps.の主文に対する時間関係は，以下の例が示すように「過去の過去」と決まっているわけではないからである．

(9) Vi que pasaron. 私は彼らが通ったのを見た．(山村1994：132)

(10) Pedí cinco millones de pesetas y ellos enviaron a una persona que ofreció una cantidad ridícula. 俺は500万ペセタを要求したが，彼らが送ってきた人間が提示したのは馬鹿げた金額だった．(山村1995：146)

(9)のpasaronというps.で表出された従属文は，viというps.が示す主文に対して「同時的」関係にあると言わざるをえない．viはver「見る」という知覚動詞のps.だからである[19]．同様に，(10)の従属文中のps.で表出されたofrecióが示す事態は，その論理関係から，enviaronというps.によって表出された主文に対して「後時的」関係を示すと考えざるをえない．このようなスペイン語のps.の振る舞いから，山村(1994,1995)は，スペイン語のps.が表出するのは発話時以前に当該事態が生起したということのみであり，その事態とそれを取り巻く他の事態との時間関係は，基本的には当該事態と対象となる他の事態の論理・因果関係によって決まる，と結論づけた．このようなスペイン語のps.の特殊性から，本稿は，単にフランス語の大過去に対応するという点からスペイン語のps.の機能をフランス語の大過去の機能と等しいと判断することはできない，と考える．

一方，(7)(8)の対応関係から，フランス語の大過去の機能はスペイン語のps.のそれと等しいと言うことはできるのだろうか．この問いに対しても，本稿は否定的に答えるしかないと考える．上でも述べたように，フランス語の従属文に出現する大過去の主動詞に対する「前時性」は，スペイン語のps.のそれとは違い，この形式の機能そのものに備わったものだからである．このフランス語の大過去という形式が示す他の事態に対する「前時性」はここで見たような主文と従属文といった一文レベルに留まるものではない．後述するように，それは複数の文の間，さらには，「発話世界」から「物語世界」あるいは「物語世界」から「発話世界」への移行といったより大きなレベルにおいてもその効果を発揮する．

次に，フランス語の大過去とスペイン語の大過去の出現頻度の違いがもっとも顕著である「語り1」の「会話文」および「語り2」の「地の文」で確認されたフランス語の大過去とスペイン語のps.について見る．まず，「語り1」の「会話文」において確認されたフランス語の大過去とスペイン語のps.の対応関係であるが，これは次の例に見られるように，「語り1」の登場人物が「語り2」のミステリーを語り終えた後，その真相について述べたり，その解説を行う場面等で出現する．

(11)　(作品1)

a.

— C'est très curieux, déclara lentement celui-ci, mais il se trouve que miss Marple a mis le doigt sur la vérité. Jones avait mis Gladys dans une situation intéressante, comme on dit. Elle était au bord du désespoir. Désireux

19　当該のps.を大過去にし，Vi que habían pasado.とすると，主動詞verの意味は「見る」から「分かる，知る」という理解・知識を表すものに変わる．

de se débarrasser de sa femme, il ① avait promis à Gladys de l'épouser quand elle serait morte. Il ②avait empoisonné les «centaines et les milliers» et les lui ③ avait remis en lui expliquant comment les utiliser. Gladys Linch est décédée *il y a une semaine*. Son enfant était mort-né et Jones l'avait abandonnée pour une autre. Avant de mourir, elle a avoué la vérité. (p. 20)

b.

— Es curioso, pero da la casualidad de que la señorita Marple ha dado con la solución.

Jones había metido a Gladys Linch en un aprieto, como se dice vulgarmente, y ella estaba desesperada. Él deseaba librarse de su esposa y ① prometió a Gladys casarse con ella cuando su mujer muriese. Él ② consiguió los «cientos de miles» y se los ③ entregó con instrucciones para su uso. Gladys Linch falleció *hace una semana*. Su hijo murió al nacer, Jones la había abandonado por otra mujer. Cuando agonizaba, confesó la verdad. (p. 272)

(11a)(11b)は点線部分が示すように，「語り２」のミステリーの真相をMiss Marpleが言い当てた後，当該ミステリーを紹介した「語り１」の登場人物が改めてそれを解説した場面である．フランス語の(11a)に出現した大過去の中にはスペイン語のps.に対応していないものもあるが，今，そのような大過去を四角で囲み，改めて大過去で表出された事態の内容を見てみると，それらはすべて「語り２」で語られたミステリーの真相に言及したものであることが分かる．それに対して，同じ(11a)に出現したpc.が示す内容は「語り２」の登場人物がその後どうなったかということであり，ミステリーの真相とは直接的な関わりを持たないものである．それは当該pc.がil y a une semaineという直示的な時の副詞句と共起していることからも明らかである．以上のことから，フランス語では「物語世界」において生起した事態を「発話世界」の「会話文」で表出する場合には大過去が用いられ，「発話世界」において生起した事態を同環境で表出する場合にはpc.が用いられる，と考えることができる．ただし，5.2.1.で見たように，フランス語では極めてまれではあるが，「物語世界」で生起した事態が「発話世界」の「会話文」でps.で表出されることがある．したがって，そのようなps.と(11a)に出現した大過去の違いが何かを明確にしておく必要があろう．この点に関して，今のところ本稿は，「物語世界」で生起した事態を「発話世界」でps.で表出するには，少なくともその「物語世界」が「発話世界」との関わりなしに独自に展開していくことを保証するだけの語句，文脈が必要である，と考えているが，詳細な検討はこれからの課題である．

さて，(11a)に対応する(11b)を見ると，スペイン語にはフランス語に見られたような大過去とpc.の区別，すなわち，「物語世界」で生起した事態を「発話世界」で言及する際には大過去が，また，「発話世界」で生起した事態を「発話世界」で言及する際にはpc.が用いられる，という区別が存在していないのが分かる．(11b)によれば，スペイン語では「物語世界」で生起した事態も，「発話世界」で生起した事態も同じps.で表出されているからである．つまり，ここでもまた，スペイン語のps.は当該事態が発話時以前に生起したものであれば，その言表世界の如何に拘らず等しく用いられる，ということが確認されるのである．しかし，それでは，(11b)に出現したスペイン語の大過去についてはどう考えればよいのだろうか．この点については，本稿はCartagena(1999)の見方を支持したい．それによれば，スペイン語の大過去の機能は「過去の過去」の表出であるが，その基準となるべき「過去時」は過去の時制形式のみならず，時の副詞句や文脈など様々な方法で示される．これは，スペイン語の大過去の出現そのものがそれが準拠する「過去時」の存在を含意することを示したものだが，(11b)に出現した２つの大過去はどちらもこの解釈に従ったものとなっている[20]．ただ，ここで注意すべきなのは，このスペイン語の大過去が示す「前時性」はフランス語の大過去の「前時性」に比べ局所的なのではないか，という点である．(11a)(11b)によれば，フランス語では「物語世界」で生起した事態はすべて大過去で表出されているのに対し，そのような条件でスペイン語で大過去で表出されているのはJones había metido a Gladys Linch en un aprieto.という一文だけなのである．この文が大過去で表出されたのは，当該事態が「作品１」のミステリー事件が起こる発端，言い換えるならば，その殺人事件が生起する前に起こった出来事だったからである．他方，その後に続くps.で表出された①から③の事態はミステリー事件の内容そのものである．つまり，スペイン語ではフランス語のように「発話世界」対「物語世界」という言表世界の対立から大過去が出現しているのではなく，あくまで問題となる事態間の時間関係から大過去が選択されるのであり，その結果，その出現は局所的なものとなる，と考えられるのである．

フランス語の大過去とスペイン語のps.の対応関係は，次の例のような「語り２」の「地の文」でも確認される．

20 (11b)に出現した最初の大過去は「語り２」の事件が起こった時をその基準時とし，二番目の大過去はその直前に出現したps.が示す事態が生起した時をその基準時としていると解釈される．

(12)　(作品１)

a.

－ Sur ces entrefaites, l'un de mes inspecteurs découvrit un fait intéressant, poursuivit sir Henry. Ce soir-là, après le souper, Mr Jones ① était descendu à la cuisine et ② avait demandé un bol de maïzena pour son épouse qui ne se sentait pas bien. Il ③ avait attendu sur place que Gladys Linch l'ait préparé, et ④ l'avait monté lui-même à sa femme, dans sa chambre. Ce qui, je le reconnais, paraissait mettre un terme à l'affaire. (p. 14)

b.

－ Uno de mis inspectores pronto descubrió un dato muy significativo－prosiguió sir Henry－. Aquella noche, después de cenar, el señor Jones ① bajó a la cocina y ② pidió un tazón de harina de maíz para su esposa, que se había quejado de que no se encontraba bien. ③ Esperó en la cocina hasta que Gladys Linch lo hubo preparado y luego él mismo lo ④ llevó a la habitación de su mujer. Esto, lo admito, nos hizo creer que el caso estaba cerrado. (p. 268)

(12a)で出現したフランス語の大過去は，「語り２」のミステリーを語る sir Henry が un fait intéressant と呼ぶ事実を指摘した部分で出現したものである．これは，換言すれば，「語り２」という「物語世界」の中に挿入された「寄生的物語世界」とも呼べる言表世界で生起した事態について言及したものと言える．このフランス語の大過去と先に見た(11a)の大過去を比較すると，前者は「寄生的物語世界」で生起した事態，後者は「語り２」の「物語世界」で生起した事態について言及したものという違いはあるが，どちらもそれが出現する直前の世界とは異なる言表世界で生起した事態について述べたものという点では共通している[21]．

一方，(12a)に対応するスペイン語の(12b)を見ると，ここでもスペイン語は言表世界の違いを時制形式の違いに反映させていないことが確認される．「物語世界」で生起した事態であれ(＝11b)，「寄生的物語世界」で生起した事態であれ(＝12b)，当該事態を語る話し手の発話時以前に生起した事態である限り同じ ps.で表出されているからである．

以上，フランス語の大過去とそれに対応するスペイン語の ps.を見てきた．その結果，フランス語の大過去は「発話世界」以外の言表世界で生起した事態を表出するという機能を持つのに対し，それに対応するスペイン語の ps.は言表世界の違いを何ら反映させることなく発話時以前に生起した事態なら何でも表出することができる，ということが明らかになった．このうちフランス語の大過去が示す「非発話世界」への言及は，次項で見るフランス語の大過去の特殊な用法に繋がっていく．

５．２．２．２．フランス語の大過去とスペイン語の ps.: 英語の過去完了との比較から

前項では，フランス語の大過去とそれに対応するスペイン語の ps.の機能をその出現環境から考察した．しかし，本稿の拠って立つ資料体が英語を翻訳したものであることを考慮するならば，フランス語，スペイン語いずれのデータも英語の干渉を受けた可能性がある．そこで本項では，前項で確認されたフランス語の大過去とスペイン語の ps.を英語の過去完了と比較対照させながら再考してみる．

まず，各作品別に英語の過去完了に対応する形式をまとめると，表３のようになる．スラッシュの右側の数字は当該作品中の英語の過去完了の総数である．スラッシュの左側の数字は英語の過去完了のうち各言語の当該時制形式に対応したものの数である．例えば，「作品１」の「大過去」「フランス語」の28/38は，作品１に出現する英語過去完了の総数38のうちフランス語の大過去に対応するものの数が28であることを示す．また，表４は，英語の過去完了とは関係なしにフランス語版，スペイン語版の各作品の中で独自に出現した大過去の数をまとめたものである．

表３：英語の過去完了に対応した時制形式

		作品１	作品２	作品３
大過去	フランス語	28/38	17/24	27/40
	スペイン語	24/38	9/24	18/40
ps.	フランス語	0/38	0/24	3/40
	スペイン語	12/38	7/24	15/40
imp.	フランス語	5/38	4/24	4/40
	スペイン語	2/38	4/24	2/40
pc.	フランス語	0/38	1/24	2/40
	スペイン語	0/38	0/24	0/40
その他	フランス語	3/38	2/24	4/40
	スペイン語	0/38	4/24	5/40

表４：英語の過去完了に対応しない大過去

	作品１	作品２	作品３
フランス語	23	28	17
スペイン語	3	9	7

表３からは，フランス語もスペイン語も，その大過去の

21　(11a)の大過去は「発話世界」に対する「物語世界（語り２）」で生起した事態を，また，(12a)の大過去は「物語世界（語り２）」に対する「寄生的物語世界」で生起した事態を述べたものである．

大部分は英語の過去完了に対応していることが分かる．しかし，重要なのは，英語の過去完了に対応した大過去以外の時制形式，また，英語の過去完了とは関係なしに出現した各言語独自の大過去である[22]．前項で見たフランス語の大過去とスペイン語の ps.の特殊性はそのような形式の振る舞いにこそ反映されているはずだからである．このような観点から，再び表 3 と表 4 を見ると，以下のことが分かる．

表 3 で特筆すべきは，英語の過去完了に対応するスペイン語の ps.の多さである．これはフランス語の大過去に対応したスペイン語の ps.と同じように考えることができる．以下の例を参照されたい．

(13)(＝8)（作品 2）

a.

Il ne se releva pas et resta où il était tombé, face contre terre. (p. 30)

b.

No se levantó, sino que permaneció tendido en el lugar donde cayó. (p. 281)

c.

He did not get up again, but lay where he had fallen prone on the ground. (p. 39)

(14)

a.

Pendant quelques années, me dit Newman, on avait tenté de renflouer le navire et de retrouver le trésor. Il existe beaucoup d'histoires de ce genre, mais le nombre des trésors mythiques transportés par des bateaux dépasse très loin celui des trésors authentiques. On ① avait même constitué une société, mais elle ② avait fait faillite et Newman ③ avait pu racheter les droits de la chose, ou Dieu sait comment vous appelez ça, pour une bouchée de pain. Il était très enthousiaste. (p. 41)

b.

Newman me contó que a lo largo de los años se habían hecho intentos de resacar el barco y recuperar el tesoro. Creo que estas historias son muy corrientes, aunque el número de barcos con tesoros mitológicos es mucho mayor que el de los verdaderos. ① Formaron una compañía, pero ② quebraron, y Newman ③ compró los derechos del precio por cuatro cuartos. Se mostraba entusiasmado. (p. 290)

c.

For some years, so Newman told me, attempts had been made to salve the ship and recover the treasure. I believe such stories are not uncommon, though the number of mythical treasure ships is largely in excess of the genuine ones. A company ① had been formed, but ② had gone bankrupt, and Newman ③ had been able to buy the rights of the thing－or whatever you call it－for a mere song. He waxed very enthusiastic about it all. (p. 54)

(13)の例は，従属文中に出現するスペイン語の ps.とそれに対応するフランス語，英語の大過去である．この例から，英語の過去完了が示す「過去の過去」もスペイン語の ps.によって表出されることがあることが分かる．しかし，フランス語の大過去とスペイン語の ps.の対応を述べたときと同様，このスペイン語 ps.が示すかに見える「過去の過去」は ps.という時制形式の機能というよりはむしろ，当該形式が出現した従属文とその主文との論理関係に基づく解釈上の産物と言える．

一方，(14)は「語り 2」の中に挿入された「寄生的物語世界」において生起した事態を示すフランス語，英語の大過去とそれに対応したスペイン語の ps.の例である[23]．先にも見たように，フランス語では「物語世界」に挿入された過去の出来事は大過去によって示されていたが，英語にもそのような傾向がある．ただし，以下で見るように，それはあくまで傾向に留まり，フランス語ほど定式化されているわけではない．一方，スペイン語にはそのような傾向はなく，その言表世界が何であれ，生起した出来事は ps.で表出されることになる．

さて，英語の過去完了との比較で看過できないのは，表 4 の示すフランス語の大過去の特異性である．この表によれば，前項で指摘されたフランス語の大過去の出現頻度の高さはスペイン語のみならず英語との比較においても明らかだからである．このことから，フランス語の大過去には，英語の過去完了またロマンス諸語一般の大過去について言われる「過去の過去」表出以外の機能，あるいは，通常その「過去の過去」が意味すると考えられている機能とは異なる機能が付与されているのではないかと推測される．そのようなフランス語の大過去の特殊性としてあげられたの

22 表 3 によれば，英語の過去完了はフランス語，スペイン語の imp.にも対応している．これも興味深い現象ではあるが，本稿では扱わない．

23 (14a)第 1 行目の on avait tenté の大過去は，他の大過去とは異なり，主動詞である ps.の dit の従属文中に出現し，その主動詞に対する「前時性」を示したものであることから，ここでは扱わない．

が前項で見た，非発話時基準の言表世界である「物語世界」（あるいは「物語世界」にさらに挿入された「寄生的物語世界」）で生起した事態・出来事の表出という機能である．そのような例としては先に(11a)(11b)(12a)(12b)を見たが，次の例もそのひとつである．

(15)　（作品２）

a.

Richard disparu, ses titres et ses biens lui revenant, un brillant avenir s'ouvrait devant lui. Le poignard avait glissé de sa ceinture lorsqu'il ① s'était agenouillé à côté de Richard et presque sans avoir eu le temps de penser, il le lui ② avait plongé dans le corps et ③ l'avait remis à sa ceinture. Plus tard, il ④ s'était poignardé lui-même pour détourner les soupçons. Il ⑤ m'avait écrit la veille de son départ en expédition pour le pôle Sud au cas, disait-il, où il ne reviendrait pas. (p. 39)

b.

Eliminado Richard, serían para él el título y la fortuna. Disfrutaría de un futuro maravilloso. Sacó la daga de su cinturón al ① arrodillarse junto a su primo, se la ② clavó y la ③ devolvió a su sitio, y luego se ④ hirió él mismo para alejar sospechas. Me ⑤ escribió la noche antes de partir con una expedición al Polo Sur, por si no regresaba. (p. 287)

c.

With Richard out of the way and inheriting his title and estates, he saw a wonderful prospect opening up before him. The dagger had jerked out of his belt as ① he knelt down by his cousin, and almost before he had time to think he ② drove it in and ③ returned it to his belt again. He ④ stabbed himself later in order to divert suspicion. He ⑤ wrote to me no the eve of starting on an expedition to the South Pole in case, as he said, he should never come back. (p. 50)

(15)は「語り２」のミステリーの真相が明らかにされた後，そのミステリーを語った「語り１」の登場人物が「語り１」に戻った上で当該事件の殺人の場を再現している部分である[24]．ミステリーと言えども，その殺人事件を実際に起こった出来事としている限り，スペイン語では ps.，英語では simple past による表出が可能であるが，フランス語にはそれが難しい．殺人事件は「語り２」という「物語世界」で展開したものであることから「物語世界」専用の ps.で表出されても問題はないと思われるが，(15a)の周囲にはその ps.が見当たらないのである．これは，当該例が「語り２」という「物語世界」が終了し，「語り１」という「発話世界」に戻った上での発言であることに関係すると思われる．つまり，すでに語るべき「物語世界」が終了しているからには，その「物語」を再度進行させることになる ps.を使用するのは不適切であり，それが ps.の出現を妨げていると考えられるのである[25]．このような ps.の特殊性は，その出現をかなり制約することになる．その結果，フランス語では，「発話世界」において「物語世界」で生起した事態について言及する場合には，大過去が使用されることになるのであろう．

以上のことは，フランス語の大過去と ps.の重要な違いを示すものと言える．つまり，フランス語の大過去が対象とする世界は単なる「物語世界」ではなく「非発話世界」であるのに対し，ps.が対象とするのは「純粋物語世界」ということを示しているからである．このうち，大過去が依拠する「非発話世界」が，否定的ではあれ，「発話世界」との関係性を持っている点は特に注目すべきである．というのも，これは，換言すれば，大過去は常に「発話世界」の存在を意識しながら用いられるということであり，これまで見てきたフランス語大過去の振る舞い，すなわち，同形式が「発話世界」から「物語世界」あるいは「物語世界」から「発話世界」へといった移行場面において頻出するという事実は，まさにこの大過去の特徴の証左と考えられるからである．次項では，このようなフランス語の大過去の特殊性が「会話文」においても確認されることを，それに対応したスペイン語の ps.，英語の simple past と比較対照させながら確認する．

５．２．２．３．「会話文」中に出現するフランス語の大過去に関して

「非発話世界」で生起した出来事を表出するフランス語の大過去は，次のような「会話文」に出現した大過去とある種の共通性を持つと思われる．

(16)　（作品３）

a.

— Je me rappelle avoir lu ça dans les journaux, dis-je. Il n'y ① avait pas eu de pertes humaines, je crois ?

24　(14)が「語り１」に戻った上での発話であるというのは，(14a)が「語り２」の話し手である人物の "J'ai appris la vérité cinq ans après cette tragédie." という発言で始まる発話の中に出現している点から判断される．

25　5.2.1.で見たように，同じ「発話世界」でも，これから語るべき「物語世界」が始まるという状況では，フランス語の ps.は比較的容易に出現することができる．

– Non, mais quelque chose d'autre ② *a été perdu*. La plupart des gens l'ignorent, mais l'*Otrante* transportait de l'or en barres. (p. 43)

b.

– Recuerdo haberlo leído. Creo que no ① hubo desgracias personales.

– No, pero se ② *perdió* otra cosa. No es del dominio público, pero llevaba a bordo lingotes de oro. (p. 291)

c.

"I remember reading about it," I said. "No lives ① were lost, I think?" "No lives were lost," said the Inspector; "but something else ② *was lost*. It is not generally known, but the *Otranto* was carrying bullion." (p. 56)

⒃は「語り 2 」の登場人物が交わした「会話文」の中に出現したものであるが，注目すべきは，スペイン語では ps., 英語では simple past という同じ時制形式で表出されている①と②の二つの事態が，フランス語では大過去と pc.という異なる時制形式で表出されているという点である．このうち最初の大過去は，発話者が新聞で読んだ事件において人身被害が何もなかったことを，また二番目の pc.は，同じ事件において人身被害はなかったがそれ以外の大事なもの（金塊）が失われたということを表したものである．つまり，(16a)は，フランス語では，時間軸上の同じ時点に定位される二つの異なる事態が，一つは大過去，もう一つは pc.,というように異なる 2 つの時制形式で表出されることを示したものなのである．一方，スペイン語の(16b)，英語の(16c)を見ると，上述したように，二つの異なる事態はどちらも同じ時制形式で表出されているのが分かる．このことから，フランス語の(16a)はすぐれてフランス語の特異性を表したものと言えるのだが，この現象には先に見たフランス語の大過去の特殊性が大いに関係していると思われる．

もちろん(16a)の大過去については，例えば，新聞で当該の事件を読んだ時を「基準時」とし，それ以前に起こった（あるいは起こらなかった）事態を表出するために出現したものという解釈も不可能ではなかろう．しかし，そうなると時間軸上で同じ時点に定位されるべきもう一つの事態がなぜ pc.で表出されたのかという問題が生じることになる[26]．そこで，本稿は前項で確認したフランス語の大過去の特徴を基に，別の観点からの解釈を提示してみたい．

本稿は，当該の登場人物が「新聞で問題の事件を読んだのを思い出した」と言った時点で，純粋の「物語世界」とは言えないまでも少なくとも発話時基準とは異なる言表世界，つまり，「非発話世界」が設定されたのだと考える．これまで見てきたように，この「発話世界」ではない世界の設定には特定の言語形式があるわけではなく，発話におけるあらゆるものがそれに関与すると思われる．そのような観点からすれば，話し手が Je me rappelle avoir lu ça dans les journaux と言っただけで，そのような「非発話世界」が提示されたと考えても無理はないのではなかろうか[27]．もしこのような考え方が正しいとすると，当該の大過去は，この新聞で読んだ事件が喚起する，発話時とは切り離された言表世界において生起しなかった事態を表出しているということになる．これに対して pc.で表出された事態は，その時間軸上の定位時点は先の大過去で表出された事態と同じではあるものの，それが対象とする言表世界は大過去で表出された事態のそれとはまったく異なったものと考えられる．すなわち，pc.で表出された事態が対象とするのは，話し手が生き，活動する「発話世界」そのものなのである．実際，「作品 3 」のミステリーの中心となるのは pc.が表出している「人身被害以外の損失物＝金塊」の行方であり，それをめぐって話し手，聞き手を巻き込んだ話が展開していく．このように，フランス語の時制形式，とりわけ，大過去と pc.は，単に当該事態が時間軸上のどの時点に定位されるかを示すだけではなく，その事態がどの言表世界を対象にしているのかまでを明示することができる形式と言うことができる．それに対して，スペイン語の ps., 英語の simple past は，ただ当該事態が発話時以前に生起した（あるいは生起しなかった）ことを表出するだけであり，フランス語の大過去と pc.のようにその対象とする言表世界までを示すことはない．

6. まとめ

以上，いわゆる「額縁」構造を持つアガサ・クリスティの推理短編小説 3 作品のフランス語版とスペイン語版を基に，フランス語とスペイン語の過去表現を比較対照した．その結果は以下のようにまとめられる．

- フランス語，スペイン語ともに「地の文」では pc.が出現しない．この結果は，フランス語の pc.を discours に属すものとする Benveniste の説，また，一般言語的に

26 (16a)のように，短い会話文に出現した大過去と pc.では，言語化された，あるいは，言語化されない文脈を想定し，そこから両者の違いを説明するということは難しい．

27 例えば，本稿の資料体の中で「非発話時世界」の設定，あるいは，その引き金となったと考えられるものとして，他に次のような語句がある．"Cela m'a rappelé le vieux Mr Hargraves, ..." (作品 1 , p. 18) "... , mais il se trouve que miss Marple a mis le doigt sur la vérité" (作品 1 , p. 20), "Je ne l'ai jamais oubliée,..." (作品 2 , p. 21), "J'ai appris la vérité cinq ans après cette tragédie, ..." (作品 2 , p. 38)

pc.は「コメント世界」に属すものとするWeinrichの説に一致するものである。

- フランス語の「会話文」ではもっぱらpc.が出現し，ps.の出現頻度は極めて低いが，スペイン語の「会話文」ではps.が頻出し，pc.の出現頻度は低い。この結果のうち，フランス語のpc.とps.の振る舞いはBenvenisteとWeinrichの両説に適うものであるが，スペイン語のpc.とps.の振る舞いは，特に，Weinrichの説とは相容れないものである。
- フランス語の「会話文」にもps.が出現することがある。しかし，Benvenisteのdiscours, Weinrichの「コメント世界」に相当する「会話文」で，Benvenisteのhistoire, Weinrichの「物語世界」で生起した事態を表出するps.が出現するためには，少なくともその「物語世界」が「コメント世界」との関わりなしに独自に展開していくことを保証するだけの語句，文脈が必要である。
- 本稿の観察では，フランス語の大過去とスペイン語のps.の対応関係が頻繁に確認された。このことからは，以下のことが明らかになった。
  1．フランス語の大過去が示すと言われる「過去の過去」は単にある事態に対する「前時性」を示すものではない。それは，「物語世界」において生起した事態を表出するという意味において，広く「発話世界」と「物語世界」の対立を顕現させるものである。
  2．フランス語には「物語世界」において生起した事態を表出する形式として大過去の他にps.という形式も備わっているが，両形式は次の点で異なっている。つまり，大過去にとっての「物語世界」とは「非発話世界」としての「物語世界」であり，その意味において，大過去は否定的ではあるものの，常に「発話世界」と接点があると言える。このことは，大過去が「発話世界」から「物語世界」へ，また逆に，「物語世界」から「発話世界」への移行の場面で頻出することと無縁ではない。一方，ps.は「物語世界」専用の形式であり，その出現に「発話世界」が関わることはない。ps.が「物語世界」が明確に設定された後に出現することになるのは，そのためである。
  3．フランス語の大過去は「会話文」にも出現するが，そのような大過去の中には，「非発話世界」で生起した事態に言及したものも少なくない。なお，このような「会話文」に出現した大過去と「非発話世界」との関係については文脈に依存する部分が多い。
  4．スペイン語のps.は，発話時以前に生起した事態を表出することをその一義とし，フランス語の大過去とスペイン語のps.の対応関係はみかけだけのものである。なぜなら，スペイン語のps.が表出するかに見える他の事態に対する「前時性」は，本質的に，共起する事態（命題）間の論理・因果関係によって決定されたものだからである。
  5．いわゆる小説において，フランス語の大過去が連続的に出現することが多いのは，それが「物語世界」そのものを対象（基準）とし，それに対して「前時」関係にある事態をすべて表出することになるからである。一方，スペイン語の大過去が局所的にしか出現しないのは，それが文レベルの事態しか対象とせず，それに対する「前時」関係を表出するだけだからである。

以上，本稿では，特に，フランス語の大過去とスペイン語のps.の対応関係に焦点が当てられることになったが，当該二言語の過去の時制形式の比較対照という観点からは，この他にも，例えば，各言語におけるps.あるいはpc.とimp.,の振る舞いといったように取り上げるべき問題はまだたくさん残されている。このような過去表現の観察および分析については今後の課題としたい。

参考文献：

Arnavielle, T. (1978): “Remarques sur l’emploi du plus-que-parfait de l’indicatif en français moderne.” *Mélanges de philologie offerts à Charles Camproux*. Montpellier: Centre d’études occitanes, pp. 615-621.

Benveniste, E. (1966) “Les relations de temps dans le verbe français”, *Problèmes de linguistique générale 1*, pp. 237-250, Gallimard.

Carrasco Gutiérrez, A. (1999): “El tiempo verbal y la sintaxis oracional. La *consecutio temporum*”, en Bosque, I. & V. Demonte (eds.) *Gramática descriptiva de la lengua española*, pp. 3063-3128.

Cartagena, N. (1999): “Los tiempos compuestos.”, en Bosque, I. & V. Demonte (eds.) *Gramática descriptiva de la lengua española*, pp. 2935-2975

Engel, D. M. (1994): “Plus-que-parfait: Past anterior or past punctual ?” *Lingvisticae Investigationes* 18, pp. 223-42.

——, (1996): “Le Passé du Passé” *Word* 47, pp. 41-62.

Majumdar, M. J. and A. M. Morris. (1980): “The French Pluperfect Tense as a Punctual Past” *Archivum Linguisticum* 11, pp. 1-12.

Molendijk, A. (2002): "La structuration logico-temporelle du texte: le passé simple et l'imparfait du français", *Chronos* 9, pp. 91-104.

Vetters, C. (1996): *Temps, aspect et narration*, Amsterdam: Rodopi.

Weinrich, H. (1974): *Estructura y función de los tiempos en el lenguaje,* Madrid : Gredos.

西村牧夫(2001)：「現在にかかわる大過去」『フランス語学の諸問題［1］』, pp. 50-62

塩田明子(2001)：「話し言葉における présent de narration」,『フランス語学研究』第35号. pp. 43-48.

寺崎英樹(1998)：『スペイン語文法の構造』, 大学書林.

山村ひろみ(1994)：「複文における indefinido と imperfecto－過去の主動詞に従属した名詞節における実態と考察－」*HISPANICA* 38, pp. 120-136.

―― (1995)：「複文内の indefinido と imperfecto－過去の主動詞に従属した関係節における実態と考察-」*HISPANICA* 39, pp. 145-158.

―― (2004)：「時制機能の確定と variación sintáctico-semántica－日記の中の pretérito perfecto simple と pretérito perfecto compuesto をてがかりとして－」,『スペイン語学論文集　寺崎英樹教授退官記念』pp. 120-128.

資料体：

Christie, A. (2002): "Tuesday Night Club", *The Thirteen Problems*, pp. 9-27, HarperCollins*Publishers*.

―― (2002): "The Idol House of Astarte", *The Thirteen Problems*, pp. 29-51, HarperCollins*Publishers*.

―― (2002): "Ingots of Gold", *The Thirteen Problems*, pp. 53-71, HarperCollins*Publishers*.

―― (1991): "Le club du mardi", *Miss Marple au club du mardi*, pp.5-21, Librarie des Champs-Élysées.

―― (1991): "La sanctuaire d'Astarte", *Miss Marple au club du mardi,* pp. 21-39, Librarie des Champs-Élysées.

―― (1991): "Les lingotsd'or", *Miss Marple au club du mardi,* pp. 40-51, Librarie des Champs-Élysées.

―― (2003): "El club de los martes", Muerte en la vicaría/La señorita Marple y trece problemas, pp. 261-273, Randam House Mondadori, S. A.

―― (2003): "La casa del Ídolo de Astarté", Muerte en la vicaría/La señorita Marple y trece problemas, pp. 274-288, Randam House Mondadori, S. A.

―― (2003): "Lingotes de oro" , Muerte en la vicaría/La señorita Marple y trece problemas, pp. 289-301, Randam House Mondadori, S. A.